

東南アジア大陸部に居住するタイ・ルー族の住居に関する研究

— 中国、ラオス、タイの各事例に基づいて —



AK12039 儀間 駿也

Keywords

タイ・ルー族 社会背景 類型分析
中国 ラオス タイ

1. はじめに

1.1 研究背景

東南アジア大陸部には、タイ・ルー族という民族集団がいる。タイ・ルー族は東南アジア各地へ分散して居住している。彼らはもともと、現在の中華人民共和国（以下、中国）雲南省西双版纳に王国を築き、生活をしてきた。しかしその後、戦争、飢饉、強制連行などの様々な理由により、数百年かけてラオス人民民主主義共和国（以下、ラオス）、タイ王国（以下、タイ）などの南方へ移住した。

かつては同じ地域で同じような住居に居住していたタイ・ルー族だが、東南アジア各地へ分散した後、住居形態にどのような変化がみられるのだろうか。また、遠く離れてもなお変わらない特徴はあるのだろうか。過去、タイ・ルー族の住居形態について国をまたいで、かつ、移動を踏まえて考察した研究はない。このことから、私はこの研究に意義があると考えた。

1.2 研究目的

本研究では、中国、ラオス、タイに分散し居住しているタイ・ルー族の住居形態の違いについて、各種図面を資料として比較、研究する。またその際、なぜ違いが生まれたのかを、各国の社会経済的背景を踏まえて考察する。その際にタイ・ルー族の故地である中国雲南省西双版纳の住居を、タイ・ルー族の住居の源流と仮定する。その後南下し、移住したラオス、タイのタイ・ルー族の住居が中国の住居とどれほど変化しているのかを明らかにする。

1.3 研究方法

本研究では、タイ・ルー族の住居の源流である中国雲南省西双版纳の住居図面と、その後の移住先であるラオス・ルアンパバーン県、タイ・プレー県と同集団の住居図面を比較する。中国の住居図面は過去の先行研究から得て、ラオス、タイの住居図面は、各地でのフィールドワークにより得た。

タイでの調査内容は、8軒の住居の実測調査とインタビュー調査である。ラオスでの調査内容もタイと同様で、調査軒数は40である。

2. 研究対象地の概要

2.1 中国について

2.1.1 生業と経済

中国は、1980年代前後から市場経済を活用した経済発展が促進された。集団農業を解体し、農地の使用権を農民に均等に配分して、農家世帯を農業経営の単位とする生産責任制が導入された。これを機に、商品作物栽培が普及するとともに、農村部における様々な経済活動が活性化した。本研究の対象地である西双版纳の生業もこの影響を受け、ゴム栽培やバナナ栽培が、それまで生活の基盤となっていた稲作に代わって急速に拡大した。

2.1.2 西双版纳について

西双版纳は、中国雲南省の最南端に位置し、ミャンマー、ラオスと国境を接する傣族自治州である。西双版纳は農業を中心とする地域であり、農業人口は総人口107万人のうち約7割を占める75万人である。西双版纳の各民族は、山の斜面を利用し、水稻、トウモロコシ、豆類、イモ類などの作物を作り、多様な生業、住居形態、服装や食文化を維持してきた。

2.1.3 中国の社会情勢とタイ・ルー族

1970年代後半から始まった「改革開放政策」により、経済成長をはじめ中国社会は大きく変化した。商品、資本、労働などの対外取引が認められ、ヒト、モノ、カネの移動が自由化されたのである。これらの政策により、都市から農村まで全国的に、農民意識から市場意識へと人々の意識は変化した。西双版纳も例外ではなく、近年、観光産業を西双版纳の主要産業と位置づけ、積極的な観光地建設を行っている。少数民族が多く存在する西双版纳では、「民族文化」を重要な観光資源の核とした「民族観光」を数多く展開している。本研究の対象であるタイ・ルー族の住居もこの「民族観光」にとって重要な役割を果たしているため、伝統的なタイ・ルー族の住居が今も数多く残っている。

2.2 ラオスについて

2.2.1 経済

ラオスは、国民の大半が自給自足的な農業に従事しており、経済的に見るとアジアで最も貧しい国の一つである。ラオスは、国連から後開発途上国（LDC）に指定

されており、一人当たり名目GDPはASEAN最低レベルである。

2.2.2 ルアンパバーン県及び調査対象村について

調査地として選定したN村は、ルアンパバーンから北へ200キロメートルほど離れた場所にある。人口504人、住居数104軒である。

2.2.3 ラオスの社会情勢とタイ・ルー族

ラオスでは長年続いていた内戦が終結し、社会を立て直すべく、チンタナカーン・マイ政策が行われた。1975年から1986年まで社会主義の時代だったラオスだが、この政策により1986年以降、市場経済化の時代が始まった。その後、経済発展が進むにつれ、政治や社会構造にも変化が現れた。これらの影響は、都心から離れたタイ・ルー族の住居にもみられる。今後ラオスでは、タイ・ルー族の伝統的な形態を維持する住居が減少し、いわゆる近代化の道を歩むと考えられる。

2.3 タイについて

2.3.1 経済と産業

タイ経済は、国際状況の変化に柔軟に対応し、かつ外国企業の力を巧みに利用することで発展を遂げてきた。1980年前半の石油ショック、1998年の通貨危機、2008年のリーマンショックなどの短期的な経済の落ち込みはあるが、総じて高くかつ安定的な成長を実現してきた。この経済成長の過程でタイは、農業国から工業国へと変身した。タイでは長らく農業が主だったが、1960年代から工業化が進んだ。1980年代後半のプラザ合意後は、日本など海外企業による直接投資が急増し、工業化が急速に進んだ。

2.3.3 プレー県及び調査対象村について

プレー県は、タイ王国の北部に位置する。Th村はそのプレー県にあるタイ・ルー族の村である。人口約535人、住居数135軒でTh寺を中心に村が広がっている。約200年前にタイ・ルー族がこの地に移住し、住み着いたとされる。

2.3.4 タイの社会情勢とタイ・ルー族

タイは、中国やラオスとは違い、昔から外交を盛んに行い、グローバルな経済発展をしてきた。そのため、タイでは農村までグローバル化が進み、本研究の対象であるTh村にもその影響が多く見られた。例えば、Th村の住居は、コンクリートが多くの住居で使用されていた。近年のTh村の住居は、中部タイのスタイルを模して造られ、伝統的な住居の特徴はなくなり始めている。

3. タイ・ルー族について

3.1 移住の歴史

タイ・ルー族の歴史は、1160年にPhaya Choengが景洪にシプソーンパンナー王国を建てたことに始まる。同王国は長い間、隣国の中国、ビルマと属国の関係でいたため、独立国であり続けることができた。「雲南の人は

父、ビルマの人は母」という言葉が今でもタイ・ルー族のあいだにあるが、その由来はこれら属国の関係からきている。

1296年、現在のタイ・チェンマイにランナータイ王国がメンラーイ王によって建国された。シプソーンパンナー王国とランナータイ王国、そして現在のラオスの位置に存在したムアンラオの3つの王国がこの時代、親密な関係を築いていた。これら3カ国は交易が盛んであり、協力関係を維持していた。この頃シプソーンパンナー王国は、現在の中国雲南省、ラオス北部、ビルマシャン州、タイ北部にまたがるほど領土を広げた、大きな王国だった。しかし、シプソーンパンナー王国の全盛期は政情不安と飢饉により終わりを迎えた。国が不安定になり、タイ・ルー族の人々は南のランナータイ王国へ移住した。また、その頃のランナータイ王国のティロッカラート王は、シプソーンパンナー王国を攻撃し、タイ・ルー族は開拓民としてランナータイ王国へ連れ去られた。このように、自主的に移住したわけではなく、強制的に移住をした経歴を持つタイ・ルー族もいる。そのような様々な理由により、この時期、多くのタイ・ルー族がシプソーンパンナー王国からランナータイ王国へ移住した。

その後、インドシナ戦争によってタイ・ルー族はラオスからタイへと移住をしたり、その他にも様々な要因により移住や南下を繰り返し、現在は中国雲南省西双版纳やラオス北部、タイ北部などの東南アジア大陸部に分散し居住している。

3.2 西双版纳におけるタイ・ルー社会の近代史

1980年代に入り、対外開放、市場経済、都市化、マスメディア、漢文化、学校教育など、タイ・ルー族の生活世界に外部から様々な新要素が波及した。集団化政策の下での閉鎖的で自給自足的な生活様式は過去のものとなりつつある一方、タイ・ルー族としての伝統的な民族性の維持や民族間関係のあり方にも変化が生じている。

3.3 観光開発とタイ・ルー文化

西双版纳の観光開発は、対外開放政策と密接に関係している。西双版纳は、1982年に「風景名勝区」に指定され、雲南省を代表する観光地となった。タイ・ルー族についても、伝統的な仏教行事が観光の目玉となるツアーが企画されるなど、西双版纳の観光化に大きく関係している。

3.4 タイ・ルー族の伝統的な住居形態

タイ・ルー族の住居は高床式であるが、中国の改革開放政策の前後で住居形態が大きく変化している。改革開放政策前は「掘立柱建築」であったが、改革開放政策後は「礎石柱建築」が出現した。ここで、「掘立柱建築」の前者をA型、「礎石柱建築」の後者をB型とする。

A型は、自然木の曲がりもそのままの掘立柱である。こうした掘立柱の軸組構法は伝統的な住居形態であり、

改革開放政策以前はすべてこの形態であった。

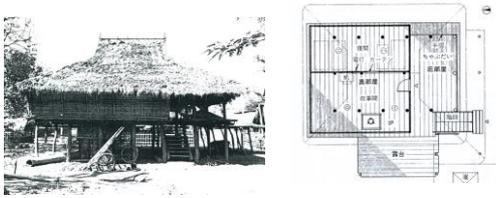


図 1 A型の伝統的住居

B型は、柱が掘立ではなく礎石の上に立てられており、それによって施工の度合いが精巧である。B型の住居は構造的にも進歩し、使用する材料が大幅に増加した。また、A型は一棟建てなのに対し、B型は二棟建てである。

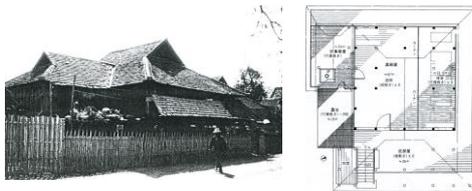


図 2 B型の伝統的住居

4. 各国の住居の平面図類型分析

4.1 ラオスにおける住居の平面図類型分析

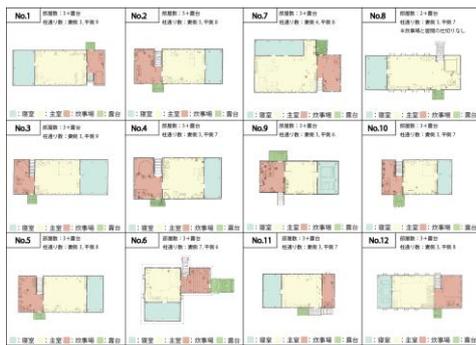


図 3 ラオスにおける住居の平面図

ラオスのフィールドワークで得られた40軒中12軒の住居の平面図を、間取りや面積に着目して類型分析する。12軒の各居室の面積の平均値を算出し、ラオスにおけるタイ・ルー族の住居の一般モデルを作成する。

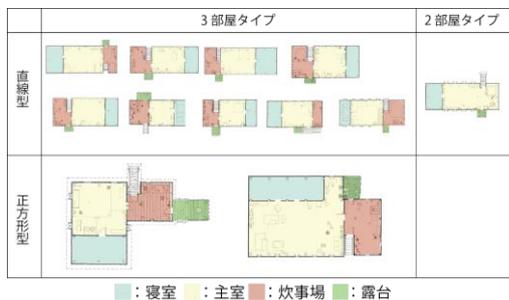


図 4 ラオスにおける住居の平面図類型分析

4.1.1 間取り

ラオスの住居の間取りはほぼ同じ構成で、階段を上がったところに炊事場、その奥に居間、さらに一番奥に寝室という間取りになっている。これは、西双版纳のタイ・ルー族の住居と同じ特徴である。また、西双版纳におけるタイ・ルー族の住居は部屋が直線型ではなく、寝

室が主室の横についており、住居が正方形に近い形であった。しかし、ラオスの住居はほぼどの住居も直線型であった。図4に類型分析の結果を示す。

4.1.2 面積

面積は以下の表1の通りである。最も面積の大きな住居はNo.1で186.5㎡、最も面積の小さかった住居はNo.9で63.4㎡であった。部屋別に見ると、すべての住居において主室が一番大きくなっている。また、家族数が多いと居室総面積が大きいという傾向がある。

表1 ラオスにおける住居の各居室及び総面積 (㎡)

	炊事場	主室	寝室	露台	総面積	家族人数(人)
No.1	33.8	106.3	42.5	4.0	186.5	5
No.2	31.8	56.0	21.0	3.0	111.8	5
No.3	24.5	63.0	38.5	3.2	129.2	5
No.4	38.8	64.0	28.0	4.5	135.3	4
No.5	29.8	59.5	21.0	3.8	114.0	3
No.6	24.5	45.5	24.5	13.5	108.0	2
No.7	29.0	91.5	28.5	6.0	155.0	5
No.8	-	89.5	26.0	4.6	120.1	2
No.9	19.2	25.0	15.0	4.2	63.4	4
No.10	22.7	44.2	20.4	5.0	92.3	2
No.11	16.3	52.0	22.75	3.0	94.0	2
No.12	35.8	52.0	18.2	3.0	109.0	5
平均値	27.8	62.4	25.5	4.82	118.2	-

4.1.3 ラオスにおける住居の一般モデル

全12軒の平面図類型分析から、ラオスにおけるタイ・ルー族の住居の一般モデルを考察する。

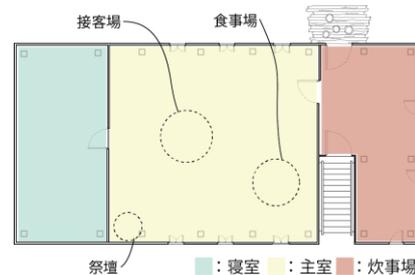


図 5 ラオスにおける住居の一般モデル

4.2 タイにおけるタイ・ルー族の平面図類型分析

ここでは、タイのフィールドワークで得られた全8軒の住居の平面図を分析する。分析方法はラオスと同様に類型分析である。しかし、タイの住居はラオスの住居とは違い、多種多様な変化を遂げているため、一般モデルを作成することは不可能である。よって、住居のタイプごとに分類・分析を行う。

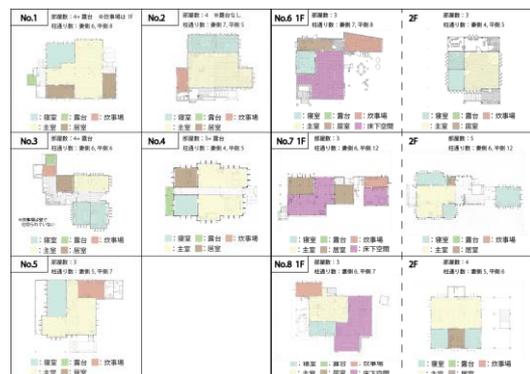


図 6 タイにおける住居の平面図

4.2.1 間取り

タイのタイ・ルー族の住居は、ラオスで見られたような、統一された特徴はあまりなく、住居が多様化している。No.6やNo.7、No.8のような、高床式住居でさえなくなっている住居もある。そのため、この3軒は地上階も分析対象とする。

タイ・ルー族は、寝室を大切に扱う風習がある。西双版纳の伝統的住居では寝室を一番奥に配置しており、ラオスのタイ・ルー族の住居も12軒すべての住居で寝室を一番奥に配置していた。タイ・ルーの特徴がなくなりつつあるタイでも、ほとんどの住居は寝室が一番奥にある。

また、8軒中5軒の住居では露台がなくなっていた。露台は西双版纳やラオスのタイ・ルー族では、水仕事(皿洗い、調理、洗濯)や物干し場として使用されていたが、タイのタイ・ルー族は1Fまたは他の空間が露台の機能を担っている。

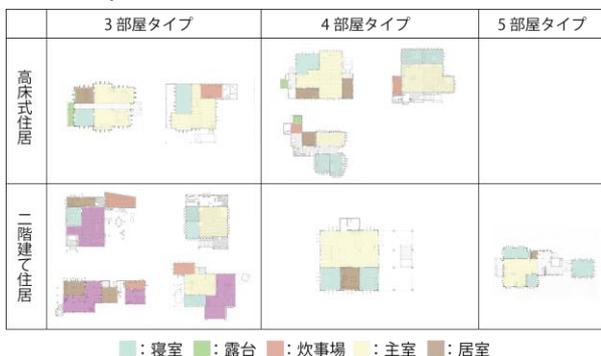


図7 タイにおける住居の平面図類型分析

4.2.2 面積

分析対象とした住居の各居室の面積を表2に示す。西双版纳やラオスの住居と比べて、タイの住居は部屋の数が多く、全体的に面積が大きくなっている。特に、二階建ての住居は、部屋の数、面積ともに大きくなっている。また、タイの2階建て住居の1Fの大部分は、居室ではなく外部と壁で仕切られていない床下空間である。この傾向は、高床式の名残りであると考えられる。

表2 タイにおける住居の各部屋及び総面積 (㎡)

	主室	床下空間	炊事場	露台	寝室1	寝室2	寝室3	居室1	居室2	その他	全面積	家族人数(人)
No.1	94.5	-	-	4.2	25.2	-	-	16.2	12.5	13.7	169.6	1
No.2	62.0	-	9.0	-	15.6	15.6	-	-	-	11.5	113.7	5
No.3	20.8	-	5.0	3.6	16.2	13.4	-	10.2	-	33.4	102.6	5
No.4	56.2	-	-	6.7	12.5	-	-	11.8	-	13.2	100.4	1
No.5	48.0	-	13.5	-	19.5	-	-	-	-	8.4	89.4	2
No.6 1F	-	56.1	20.3	-	15.1	-	-	15.0	-	13.0	119.5	6
2F	37.7	-	-	-	9.5	8.1	-	-	-	28.4	83.7	-
No.7 1F	-	53.5	8.0	-	-	-	-	13.5	10.9	2.2	88.1	7
2F	31.0	-	-	-	14.3	10.1	4.4	1.8	-	26.1	87.7	-
No.8 1F	57.4	82.9	21.7	-	19.8	-	-	-	-	8.0	189.8	4
2F	53.4	-	-	-	11.2	10.5	-	10.5	-	57.0	142.6	-
平均値	51.3	64.2	12.9	4.8	16.2	11.5	4.4	11.3	11.7	19.5	117.0	-

5 各国の住居の断面図による分析

ここでは、各国の断面図を用いて分析を行う(図8)。分析項目は床下高さ、2階高さ、棟東高さ、屋根勾配の4項目である。なお、タイの住居は高床式と二階建ての両タイプにて分析を行う。

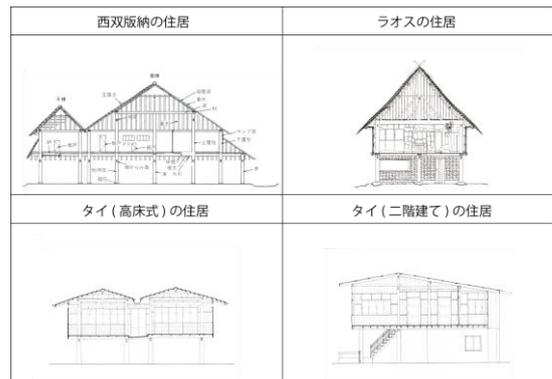


図8 各国の住居の妻側断面図

表3から、ラオスの屋根勾配が急であることがわかる。これは、棟東の長さが長いことや屋根が竹でひかれていることが要因である。一方、タイの住居の屋根はスレート、トタンでひかれており、勾配は緩い。床下の高さについては、別稿で分析される人体寸法に関わると考えられるが、どれも相応の高さがあり様々な利用がされている。

表3 各国の住居の断面分析

	床下高さ(mm)	2階高さ(mm)	棟東高さ(mm)	屋根勾配(%)
中国	2135	1700	1870	69.2
ラオス	2000	2100	3500	125.0
タイ(高床式)	1600	2200	600	33.3
タイ(二階建て)	2250	2500	500	15.3

6 考察

6.1 西双版纳とラオスのタイ・ルー族の住居比較

西双版纳とラオスのタイ・ルー族の住居を比較すると、まず、ラオスの住居には半屋外空間の底部屋がなくなり、階段を上がるとすぐに屋内へと繋がる。屋内に入ると、西双版纳の住居は正方形の住居空間が広がるのに対し、ラオスの住居は長方形の住居空間が広がる。しかし、寝室が一番奥に配置されている間取りはどちらの住居にも共通している。

6.2 西双版纳とタイのタイ・ルー族の住居比較

西双版纳とタイのタイ・ルー族の住居を比較すると、タイの住居には明らかな変化が現れており、すでに一般モデルを導くことができない。調査対象とした全12軒中、露台があったのは3軒であった。また、1F部分が完全に居室化され、高床式住居ではなく二階建ての住居が3軒あった。しかし、やはり寝室はほとんどの住居が一番奥に配置しており、タイにおいても、タイ・ルー族の伝統的な慣習が残されていることがわかる。

参考文献

- 1) 長谷川清「国境を越えるネットワークとエスニシティの動態」
東南アジア研究35巻4号,1998年3月
- 2) 田中麻里「タイの住宅における多目的な空間について」
2000年度日本建築学会関東支部研究報告集
- 3) 若林弘子「高床式建物の源流」弘文堂,1986年
- 4) 馬場雄司「タイ・ルーであろうとすること,タイ・ルーでなくなること」東南アジア研究35巻4号,1998年